九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

海外英語研修科目のクリルとしての適性

鈴木，右文
九州大学大学院言語文化研究院 ： 教授

https://doi.org/10.15017/1657141

出版情報：言語文化論究. 36, pp.51-64, 2016-03-18. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

海外英語研修科目のクリルとしての適性

鈴　木　右　文

１．はじめに

九州大学の学生に対して1996年以来、毎年ケンブリッジ大学ペンブローク・カレッジ（Pembroke College）で海外研修が行われている（事前研修あり）。この研修は2015年度から、基幹教育における正規の英語授業（学術英語認定科目）となった。英語科目の種類としては、海外研修のカテゴリーに入るのは当然だが、本稿では、いわゆるクリル（CLIL=Content and Language Integrated Learning）の性格が強いことが特徴であり、その意味で存在価値の高い科目だと主張し、そのような内容であることがより英語研修の効果を高めると訴える。２節では、この海外研修授業（以下「本研修」）の概要を述べる。３節では、九州大学の英語カリキュラムとその中における本研修の位置について述べる。４節ではクリルとは何かを簡単に示す。５節では、本研修の現地研修における専門科目のクリル的性格を主張する。６節では、事前研修と現地研修における英国の歴史文化の学びのクリル的性格を主張する。７節では、事前研修と現地研修における科学の学びのクリル的性格を主張する。８節は全体の総括である。

２．ケンブリッジ大学英語・学術研修の概要

本節では本研修の概要を述べるが、詳細は鈴木（2013a）が詳しい。さらに参加者の語彙力伸張について鈴木（2013b）、英語検定試験スコアの伸張について鈴木（2009）、歴史の学習について鈴木（2010）を参照されたい。

２．１　創設と歴史

九州大学における本研修「ケンブリッジ大学英語・学術研修」は、1996年に当時の廣田稔教授（現九州大学名誉教授）により創設された。廣田教授は1992年度にケンブリッジ大学ペンブローク・カレッジ（英国風にはペンブルック・コレッジ）で研究し、そこで九州大学の学生が夏期講座で学べたらとの思いを深くして、複数年にわたる困難な交渉の結果、試行として1996年夏に15名に対し英語科目のみの研修が実施された。1998年度からは専門科目も加わり、1999年度には筆者が同行するようになり、2000年からは九州大学言語文化研究院とペンブローク・カレッジとの間で学術交流協定が締結され、部局内での認知度も上がった。廣田教授が福岡女学院大学へ異動した2003年度からは筆者が企画・引率を行い、現地研修の前に国内で本格的な事前研修も実施されるようになって、発展を遂げてきた。2014年度に現地研修を迎えたグループまでは、前任者廣田教授もしくは筆者が企画・運営を個人として行っていたので、学術交流協定により部局での認知度が高まったとはいえ、契約も個人の名義で行う形になっていて、あくまで個人主宰の事業であり、見かけ上は九州大学が

何もコミットしない形になっていた。ところが、2016年度に現地研修を迎えるグループからは言語文化研究院公式支援事業という位置づけになり、募集においても2015年４月には、チラシにはっきり「言語文化研究院支援事業、学術英語認定科目」と示された（2015年度に現地研修を迎えるグループから本研修は学術英語認定科目となったのではあるが、2014年度における募集段階では言語文化研究院支援事業ではなかったので、過渡期的な位置づけであった）。

２．２　募集

現在の本研修は、募集準備期間と事前研修と現地研修と成績評価期間に分かれている。募集準備は現地研修の前年１～２月頃の募集チラシ制作から始まり、３月には募集用ウェブサイト（http://www.flc.kyushu-u.ac.jp/~yubun/cambridge.html）の内容が更新され、４月には英語科目の授業で新入生にチラシが配布される。４月末には過去の参加者も出席の上で説明会を行い、５月から10月にかけて応募を受け付ける。チラシ配布の対象は新入生だが、申込は２年生以上も可である（但し現地研修参加者は契約上九州大学の在籍学生に限られるので、次年度も九州大学に在学することが条件となる）。第１次選抜は、申込書の内容と入学直後の英語力診断テスト（TOEFL-ITP）のスコアと前期までの GPA に基づいて行われる。その合格者に連絡を取って面接を行い、さらに適性を確認、11月初旬に最終合格者を選ぶ。契約上の最低催行人員とペンブローク・カレッジの寮の収容定員とにより、28-30名のグループとなる。

２．３　事前研修

申込時点で英語学習の指示を出すので、事実上本研修での英語学習は申込時点で始まっているが、最終合格者に対して事前研修が始まるのは11月半ばのメールによる一斉連絡からである。本研修では現地研修の週末旅行も含めて指導するため、11月半ばから最初の学習連絡会（例年12月上旬の土曜日）までの間に各人が英国地誌を自分で学習して旅行先を選定し、さらに研修ウェブサイトにあるアドバイスに基づいて自分で行う英語学習の方法と教材を設定することを求めている。学習連絡会は12月上旬、４月上旬、６月上旬、８月中旬の計４回土曜日に実施され、英国の歴史文化社会やケンブリッジ大学の学術等についての学習や発表、週末旅行のための学習や準備が行われるが、この他個人または小グループでの自律的英語学習活動も実施される。筆者は世話教員として、学習連絡会の運営の他、学習進捗や旅行準備状況について参加者に定期的な報告を求め、それに対してメールによる一斉指導・個別指導も行う。週末旅行については、12月の学習連絡会後、１月下旬まで週１回昼休みに集合して旅行グループや行程について調整を進めさせる。この他に世話教員の仕事には、航空券の手配、契約書締結、筆者の所属部局である言語文化研究院とペンブローク・カレッジとの学術交流協定年次文書の交換といった実務がある。

２．４　現地研修

現地研修は８月半ばに出発、帰国は９月上旬となる。ペンブローク・カレッジから歩20分程度の閑静な高級住宅街にある寮を借り切る。現地研修の運営はペンブローク・カレッジの国際プログラム・オフィスが担当、本研修専用の英語科目と専門科目がいずれも10名程度で実施される。

英語科目では、学生はプレースメント・テストにより３段階のグループに分かれ、それぞれが３種類（例年学術英語、英語会話、文化英語）の授業をいずれも受講する。学術英語では、学術に適切な語彙・表現・作文技法を学び、英語会話では、英国やケンブリッジの身近な話題について対話演習が行われ、文化英語では、歴史文化上の人物や項目の説明の訓練や押韻を踏まえた詩作などが

行われる。そしてグループ別に必ずいずれかの授業において、街に出ての活動やリサーチを伴うプレゼンテーションが実施される。いずれも10名程度の授業の中でさらに活動毎に小グループを組み、担当教員が参加者個々の力を見据え目配りしながら運営する。担当教員は、最低限大学院修士課程修了以上の学歴を持ち、TESOL の講習や教授経験を積んだ者をペンブローク・カレッジの国際プログラム・オフィスが責任を持って選任する。１つの授業は１コマ75分で12回（合計15時間）実施され、３つの授業の合計で45時間の授業となる。

専門科目は、事前研修の際にシラバスに基づいて３つの授業からひとつ選択する。授業時間は１コマ75分で、試験を含め10回実施される（合計12時間半）。この他の詳細は５節に譲る。

この他、３回の晩餐会（Formal Hall）が正装で実施され、学生30名程度の中に原則として英語教員３名、専門科目教員３名、ケンブリッジ大学の学生であるプログラム・アシスタント４名（と筆者）が加わり、30分の芝生上でのレセプションと90分のディナーの間、学生は現地教員やプログラム・アシスタントが繰り出す教養あふれる話題に取り囲まれ、フォーマルなスピーチも行われる。また、プログラム・アシスタントが準備してくれる豊富な行事があり、隣村のグランチェスターへのハイキング（ラッセル、ウィトゲンシュタイン、ウルフ、ブルック、ケインズなどが集まったグランチェスター・グループで有名）、クリーム・ティー（詩人トマス・グレイゆかりの部屋で行われる）、外食会、スポーツ、映画、野外劇、ケム川の両脇のカレッジ群を巡る舟遊びのパンティング、クイズ大会、パブ・クロール等でも現地の歴史文化に触れ、英語を使うことになる。

２．５　成績評価

帰国後レポートを10月までに提出させ、現地研修の科目の成績や事前研修の様子も合わせて科目としての成績評価を11月までに行う。

３．Q-LEAP における位置づけ

本節では、本研修がどのような科目として英語カリキュラムの中に位置づけられているかを確認する。

九州大学では2014年度から新しい教養教育として、基幹教育（主に１年間）が導入された[1]。その中に言語文化科目がある。従来の英語（第１外国語とした場合）の卒業所要単位数は、文系学部で７単位、理系学部で６単位であったのに対し、基幹教育では、文系学部で７単位、理系学部では８単位または10単位である。

基幹教育における英語教育カリキュラムは大幅に刷新され、Q-LEAP と呼ばれる（Kyushu - Learning English for Academic Purposes）。主な特徴に明確な学術英語志向と積み上げ方式がある。すべての英語科目の名称に「学術英語」が冠せられ、１年生では学術英語１、２年生（以降）では学術英語２、意欲の旺盛な学生には学術英語ゼミという種別が用意されている。

学術英語１では、指定されたリーディング・リスニング、ライティング・スピーキング、CALL（授業時限や教室の設定がなく、学生が個人所有のコンピュータ上で自律学習を行う）の授業を履修する[2]。学術英語２は、学生が自分のニーズに応じて異なる種類の科目（「リーディング・リスニング」「ライティング・スピーキング」「オーラル・コミュニケーション」、「テスト・テイキング」）の中から受講する授業の希望をウェブ登録システム上で出す選択必修となっている[3]。学術英語ゼミも学術英語２と同じウェブ登録システムで登録を受け付けるが、高度な少人数制授業で１コマ２単位となっている。

また、これらの３種別の科目は、学術英語１→学術英語２→学術英語ゼミというレベル的な積み上げのステップを構成している。

こうした構成を取っている英語カリキュラムの中で、最高のレベルに位置し、特に意欲が旺盛な学生が選択する学術英語ゼミの種別の中に、学術英語認定科目という科目がある。ゼミ科目なので２単位であるが、学術英語２と異なり、１年生でも履修できる。この科目の授業はいくつか設定されており、授業時間帯の設定はなく、夏期集中で行われたり、研修旅行で構成していたり、実態は様々である。従来は行事が行われてから単位認定を申請して審査を受ける制度になっていて、単位認定に足る内容かどうかの審査を受けるため、単位が認定されない可能性もあったのに対し、基幹教育では、はじめから授業として認可されていれば、実施に当って通常授業のように成績判定がなされる。本研修はこの学術英語認定科目の授業として位置づけられていて、１年生にも開放されているのだが、前年５月から募集が始まり10月に締切られるため、事実上現地研修時は２年生以上となる。学術英語認定科目にはいくつかの授業が審査の上で設定されていて、成績表ではどの授業を取っても「学術英語認定科目」としか表示されないが、サブタイトルをつけて運用上は区別し、重複履修ができることとなっている。

本研修は通常の英語科目と異なる点が多く、学術英語認定科目とするのにふさわしい。第１に、固定した授業時間帯を持たない。第２に、あらゆる学部学科の学生が学年に関係なく参加できる（但し現地研修を１年生の間に迎えることは無理であり、また現地研修への参加は九州大学への在籍が契約上の条件なので最終学年の学生の申込も事実上無理）。第３に、事前研修・現地研修で求められる学習量はどう考えても通常授業の２単位以上に相等する。第４に、少なくとも足かけ２学期にわたって学習を継続することになるので、他の英語科目のような半期の授業ではない。第５に、内容が特定技能に限らず多岐にわたっている。第６に、参加する学生を教えることになる者が、単位認定権者の他に多く存在している。第７に、英語が使用される文化の中で実際に生活するため、ある意味「演習」ではない側面がある。

４．クリルとは何か

世は進み、日本の大学での英語教育における授業の牧歌的な時代はとっくに終わっている。教員の中には、筆者のように、伝統的英語英米文学の世界で院生時代を過ごし、大学における英語教育に関係する学問を修めたり、教育実践についての研修を積んだことのほとんどない者の比率は少なくなってきており、同時に、英語教育学を修め、大学における英語教育の課題とその解決に対して専門的見識を持つ教員が増えて来ている。その中で、旧時代からの伝統的教員は、大学の英語教育の中で次々と新しいトレンドが取り沙汰されるたびに、研究や運営実務等で時間が取られる中、それらの新しい事態を理解するように努力し、自らの対応能力の低さを嘆きながらも、何とか教わる側の学生に少しでもより適切な授業をすることができないかと、少しは汗をかいてきている。

筆者が大学教員になって最初に経験したそうした事態は、CALL システムの導入であった。その他一般的に大学英語教員が経験してきている事態には、共通教科書の編集、教科書指定の授業、少人数制作文クラス、大人数制 CALL 授業、完全自律型 CALL 授業、特殊な CALL 授業の開発と実践、授業支援システムの組み込み、TA の導入、個別授業のオンラインシラバス、科目毎の共通シラバス、個別シラバス・共通シラバスへのルーブリックの導入、シラバスの日英語並記、再履修専用クラス、国際英語検定試験を利用した英語力診断テスト、SALC（Self-Access Learning Center）の創設、学部英語コースの導入、大学院共通教育への関与、大学院専門教育への関与、GPA 制度、積上

式英語カリキュラム、スーパー・グローバル大学創成支援プロジェクト、選択制授業の受付システム、英語教育へのコーパス言語学からの貢献、英語教育への教育統計学の知見の導入、欧州共通参照枠、CAN-DO リスト、反転授業、教材媒体のデジタル化、授業マネジメントへの Moodle, Blackboard 等の導入の検討等々がある。

こうしためまぐるしい動きの中で、昨今大学英語教育の中でしばしば取り上げられるようになってきているのがクリルである。日本語では内容言語統合型学習と訳されることが多いようだが、その意味するところには曖昧な部分がある。英語以外の専門科目と英語学習を統合しようというわけで、英語教育の観点から見れば、英語の学習機会の増加や教材の拡幅に寄与する動きであり、筆者もその効果は大きいと考えるが、英語以外の教科を英語で行うのか、英語科目を他の専門分野を題材に行うのか、どちらの科目ともカウントできる形で行うのか、つまり教育カリキュラムの中でどのように扱うかが多様であるために、どれに力点がおかれるかについて曖昧な印象がもたらされるものと思われる。事実クリルの分類として、英語教育の一環として行う soft CLIL と専門科目教育の一環として行う hard CLIL の区別がある。クリルの諸相については、Coyle, Hood and Marsh（2010）、渡部・池田・和泉（2011）、和泉・池田・渡部（2012）などを参照されたい。

本研修は、英語教育に力点を置く立場から見ても専門科目教育に力点を置く立場から見てもクリル的要素を多く含み、まさにそれが特徴となっていると言えると考えられる。本稿では次節以下、そのような主張の根拠を見ていくが、あわせて池田（2011）の言う下記のクリルの十大原理に照らしてクリル性が強いことを確認する。

1　内容学習と語学学習の比重は１：１である
2　オーセンティック素材（新聞、雑誌、ウエブサイトなど）の使用を奨励する
3　文字だけでなく、音声、数字、視覚（図版や映像）による情報を与える
4　様々なレベルの思考力（暗記、理解、応用、分析、評価、創造）を活用する
5　タスクを多く与える
6　協同学習（ペアワークやグループ活動）を重視する
7　内容と言語の両面での足場（学習の手助け）を用意する
8　異文化理解や国際問題の要素を入れる
9　４技能をバランスよく統合して使う
10　学習スキルの指導を行う

５．現地研修における専門科目のクリル的性格

本研修の現地研修において、専門科目として３つの授業からひとつを選択して履修すること、授業の選択は事前研修のうちから行うことは既に述べたとおりである。授業はこれまで、人文科学、社会科学、自然科学の３つの分野であり、具体的内容や担当教員は研修の歴史において何度か変更があった。2015年現在は、人文系が「20世紀の芸術と建築（Art and Architecture in the 20th Century）」、社会系が「現代イギリスの成り立ち（The Making of Modern Britain）」、自然系が「ケンブリッジにおける科学（Science at Cambridge）」で、いずれも担当者はケンブリッジ大学で Ph.D を取得した者が最低限となっていて、自然系はケンブリッジ大学の現職の教員である。受講者は３等分が理想的であるところ、３等分から見てプラス１名を許容し、例えば３つの授業を11名11名８名とできるようにはしているものの、それ以上の偏りは許容できない。これの原因は、ケンブリッジにおけるカレッジが学部等と異なり、スーパーヴィジョン（supervision）という少人数制の指導（少

なくともペンブローク・カレッジの文系では通常１～２名）の場所であるため、10名前後という少人数でも収容可能な部屋が少ないからである。

ここで2015年度の授業概要に基づいて内容をまとめておく（学生にあらかじめ配布される英文でA4一枚程度の概要を筆者が日本語で要約したもの）。

「20世紀における芸術と建築」（以降「芸術」）

20世紀では伝統的芸術に飽き足らず範囲を拡大して芸術や建築が創造されており、これらが私たちの生活にどう影響しているかを考察する。授業ではフィッツウィリアム博物館の絵画、ジーザス・カレッジの彫刻、ケンブリッジ大学の建築物を見学し、創造実践も行う。話題は西洋のものが中心だが、西洋と日本の相互影響についても触れる。

「現代イギリスの成り立ち」（以降「英国史」）

1800年以降の帝国の興亡、産業革命、貴族政治から民主制へ、２つの大戦、宗教色の希薄化と激動した英国史を、政治、経済、科学、芸術、スポーツなどの観点から見る。英国がなぜダーウィン理論を簡単に受入れたのか等の特定の問題もいくつか扱う。現代史の中での動きを見るため、博物館での芸術鑑賞と大学施設の見学も行う。

「ケンブリッジにおける科学」（以降「科学」）

ケンブリッジ大学がこれまでに擁した科学者たちとその理論に触れ、それが現在どのような学問分野でどのように具体的研究に応用されているのかを見る。講義だけでなく、実験室や天文台や植物園の訪問、模擬犯罪捜査等の活動と組み合わせる。

まずはこれらの授業を第４節で見たクリルの十大原理と付き合わせると、完璧とは言わないまでも充分基準を満たしていると思われる。

１　内容学習と語学学習の比重は１：１である

これは英語科目と専門科目をトータルで見た場合に達成されている。専門科目の講師には英語を学ばせようという意図はないが、筆者の側には英語を学術目的で使用する訓練であるという意図がある。

２　オーセンティック素材（新聞、雑誌、ウエブサイトなど）の使用を奨励する

専門科目のどの授業もネイティブ・スピーカーの研究者が作成した教材によっており、英語圏の学術研究において実際に使用される素材を用いていると考えてよい。

３　文字だけでなく、音声、数字、視覚（図版や映像）による情報を与える

専門科目のどの授業でも必ずケンブリッジ大学の施設への訪問を含む。「芸術」ではフィッツウィリアム博物館（Fitzwilliam Museum）での絵画鑑賞と大学の建築物の見学があり、「英国史」でもフィッツウィリアム博物館で現代芸術の展開についての見学を行い、「科学」では大学植物園、生物科学の研究施設、天文台、天文研究所を訪問する。この他適宜ヴィジュアルな資料も用いられる。

４　様々なレベルの思考力（暗記、理解、応用、分析、評価、創造）を活用する

「芸術」では絵画や建築物の現物に理論を応用して評価を行い、芸術の創造活動も行う。「英国史」では歴史的事実から各時代の特徴を理解し、そこから得られた分析結果を他の時代に応用する。「科学」では試験に備えて暗記すべき事項が多く、犯罪捜査のシミュレーションでは緻密な分析が行われる。

５　タスクを多く与える

「芸術」では鑑賞・評価、創造活動が多く行われる。「英国史」では各項目ごとに意見の表明やプレゼンが求められる。「科学」では犯罪捜査やDNA関係の謎解き等のタスクが与えられる。

6　協同学習（ペアワークやグループ活動）を重視する
いずれの授業でも、協同学習が基本となっている。
7　内容と言語の両面での足場（学習の手助け）を用意する
これは英語科目と専門科目をトータルで見た場合に達成されている。
8　異文化理解や国際問題の要素を入れる
「芸術」で扱われる西欧世界の芸術と建築は、日本人学習者にとって異文化そのものである。「英国史」では、現代史の中における移民の問題をはじめ多くの国際問題が取り扱われている。「科学」において経験するケンブリッジ大学には、様々なトップレベルの施設や偉人の足跡が見られ、九州大学から参加する学生にとってはまさに異文化の環境である。
9　4技能をバランスよく統合して使う
いずれの授業でも、文字の資料を読み、講師の講義を聴き、試験やミニレポートを書き、口頭で意見表明やプレゼンを行う。
10　学習スキルの指導を行う
英語の学習としてのスキルの指導はないが、留学した場合に専門科目にどのように取り組んだらよいかを実践で学ぶ機会が提供されていると言えよう。
また、こうした専門科目の授業は、学術英語認定科目としての本研修において、英語そのものに留まらない専門的内容を英語で学ぶものになっており、それが英語科目の枠の中に組み込まれることにより、本研修のクリル性が高まると言える。本研修が「英語・学術研修」と名乗るのにはそうした理由がある。教科書の内容が理系のものになっただけでクリル性が高くなるわけではなくて内容を学ぶこと自体に意味があるものが本当のクリルであると考えた場合でも、本研修には真正なクリル性があると認められる。

6．事前研修と現地研修における英国の歴史文化の学びのクリル的性格

本研修では、事前研修において、英単語試験に備えた英単語学習をはじめとする英語そのものについての自律的訓練を積んでもらう他、英国の歴史文化の学習に取り組み、現地研修でも、英語科目の中で英国の歴史文化が題材になることが多い。また現地研修で英語文化圏に身を置くこと自体が歴史文化を学ぶ良い機会である。さらに、現地研修の専門科目の担当教員があらかじめ指定した専門用語の学習などを事前研修の間に進めておくことも、歴史文化の学習につながる。
これらのうち、事前研修においては、筆者による90分程度での英国通史の講義がある他、薄い英文による教科書を使用して、簡単な英国通史（Cunningham 2011）を勉強してもらう。わずか4回の学習連絡会では教科書の内容をすべて直接カバーすることはできないので、参加者には自己学習してもらい、定期的に指定範囲についての学習で製作したノートのコピーの提出を求めており、その出来具合は学術英語認定科目としての成績に当然影響する。全訳に近いテキストだけのものもあれば、図式的にノートをまとめて何とか歴史の流れを理解しようと苦闘した跡の見られるものもある。中には疑問に思った事項について、教科書外の情報源をもとに調べ物をした結果を加えたものも見られる。ノート自体は日本語でまとめ、内容理解を優先させるように求めているが、用語については必ず日英語並記として、日本での標準的訳語と英語圏での呼称の確認を求める。教科書が本文50頁ばかりと薄いので一見簡単にこなせるように見えるが、文字が小さいことと高校までの世界史の学習分量が少ないことが理由で、実際のところ学生の間ではてこずったという感想が多い。ノート提出は4回に分かれているが、最低でも初回、そしてできるだけその後の回についても、まとめ

方のアドバイスや誤記の指摘等のフィードバックを行う（因みに誤記としては、単純なスペルミスの他 pope を「法皇」とするようなものが代表的)。この他に、各時代のダイジェストを学習連絡会の際に分担してプレゼンしてもらう機会も持つ。こうした事前研修での歴史学習の利点のひとつとして、現地研修において平日に見学するケンブリッジ市内の対象物、週末旅行において見学する英国各地の対象物に対する理解を助ける。特に大聖堂や教会の見学時に、キリスト教各派間の関係や埋葬されている王の功績など、歴史を学ばなければ無視してしまうことをきちんと拾うことができる。特にほとんどの学生が訪れるスコットランドについて、イングランドとどのような戦いの歴史があったかに無知であれば、英語科目の一環としての旅行とはとても言えない。こうして英国史学習は、英文資料の読解訓練をはるかに超え、英国の歴史という専門的内容に迫るクリル的作業と言える。歴史事項の学びが深まる点に関しては鈴木（2010）を参照されたい。

事前研修では、英国の歴史文化について、参加者が分担して項目毎に調査し、プレゼンを行うことで成果を共有する。これの目的も英国史の教科書の学習と同様だが、より広く英国の社会や大衆文化にまで対象を広げている。ここ数年固定されてきている項目は以下のとおりである（(31）以降は2015年度の事前研修から追加)。

１）ケンブリッジ大学の概要
２）ケンブリッジ大学の歴史
３）ペンブローク・カレッジの概要
４）ケンブリッジ大学各カレッジの概要
５）英国の政治制度の概要
６）イギリスの医療・社会保障制度
７）イギリスの国内外の問題
８）シェークスピア
９）英国の文学の概要
10）英国の演劇事情
11）英国の映画事情
12）英国の博物館
13）英国の美術館
14）英国のクラシック音楽事情
15）英国のポピュラー音楽
16）英国のスポーツ
17）主要な建築様式
18）英国の科学者とその業績の概要
19）キリスト教の歴史
20）英国の食文化
21）英国の酒類の概要
22）英国の園芸文化
23）英国の貿易・物産
24）英国の世界遺産の概要
25）英国の地域
26）王室
27）貴族
28）英国の城郭
29）英国の地理的条件
30）英国の教育制度の概要と大学のランク
31）英国の児童少年文学
32）英語の歴史
33）主要なデザイン様式やブランド
34）スコットランド
35）ウェールズ
36）北アイルランド
37）英国の大企業

このプレゼンは、英語という言語文化科目の文化面を担うが、専門用語は必ず日英語並記するため、あわせて現地研修での英語科目を助けるので、広い意味で英語学習を助ける歴史文化の専門的学習だと言え、言語の背景文化も専門的分野のひとつと考えれば、広い意味ではクリル的な活動であると言うことができるであろう。

事前研修ではまた、現地での週末旅行の準備も行う。準備に当っては国内の業者を介さず、自分たちの力で旅程を組み立て、予約が必要な宿泊や交通手段等の手配を直接現地とのやりとりで行う

ことを求めている[4]。これには、ケンブリッジ以外の英国をしっかり見学するように促し、少なくとも見学の意義を比較検討して訪問地の選択ができる程度にまで各地の理解をはかるという目的があるが、同時に、業者に頼らず自分たちで旅程を組み直接現地とやりとりして予約の手配を行うことにより、英国の交通等の仕組みの基礎的事項の理解、地点間の距離的感覚の把握による地理的力量の開発などもはかることができる。交通については鉄道やバスのウェブサイト、予約については英文の電子メールや英文のウェブ・フォームを利用することになり[5]、オーセンティックな英語運用の実践とともに専門的文化事項を学んでいくことになるわけである。

事前研修では、現地研修での専門科目に「芸術」または「英国史」を選択する学生にとっては、授業担当教員が事前に指定した専門用語の学習などを事前研修の過程で進めることによって現地での受講に備えることになるが、これもまた歴史文化の点で事前研修のクリル性を高める。「科学」の場合も、科学史が文化の一部なので、同様のことが言える[6]。

以上の事前研修の内容は、４節で見たクリルの十大原理を大方満たす。第１に（内容と語学の比重が１：１）、自律的英語学習と歴史文化の学びをどちらも同様に重視している。第２に（オーセンティックな素材）、歴史教科書は歴史を提示する本としてオーセンティックであり、発表や週末旅行の準備過程でのリサーチでは現地ウェブサイトや現地出版社の英文の文献をも使うことになる[7]。第３に（文字以外の情報）、プレゼン等で地図なども含めた視覚資料を扱う。第４に（様々な思考力）、英単語の「暗記」がある他、現地の情報に基づく旅行のプランニングなどは情報の理解、分析、応用を含み、作品としての計画を創造する活動である。第５に（多量のタスク）、英単語の学習、自律的英語学習、英国の歴史文化の学習、旅程の作成、専門科目の予習など数々の課題を与えている。第６に（協同学習）、旅程作成や小グループによる自律的英語学習は完全にグループ活動である。第７に（内容・言語両面の学習支援）、英語そのものの学習と内容とに同等の重みを置いて学習支援を行っている。第８に（異文化理解・国際問題）、プレゼンや歴史文化学習において、異文化摩擦や国際問題の要素が入っている。第９に（４技能のバランス）、４技能の訓練を自律学習により行うこととしている。特に１分スピーチという個人で行う訓練を必須としている[8]。第10に（学習スキルの指導）、事前学習についても週末旅行の準備についても十分に技術的な指導を行っている。

現地研修での英語科目もまたクリル的側面を持つ。３種類の英語授業（学術英語、英語会話、文化英語）のうちひとつは文字通りの「文化」英語であり、押韻を踏まえて詩作を試みるなどという内容は一般英語を超えてまさしく専門科目の内容でもある。また３つある英語授業で取り上げられるディスカッションやプレゼンの題材には、英国に因んだものが多数含まれる。これらの英語授業もクリルの十大原則を満たす。第１に（内容と語学の比重が１：１）、英語の授業ではあるのだが、ケンブリッジやイースト・アングリアゆかりの人物や歴史事項などを多く題材に選んでいて、内容へのコミットも強い。第２に（オーセンティックな素材）、使用される素材は現地でのものばかりであり、必ず博物館での授業も含まれる。第３に（文字以外の情報）、図表や博物館等視覚情報も使用される。第４に（様々な思考力）、学術英語の語彙習得といった暗記、プレゼンのための事項の理解と分析、集めた素材の評価等が必要になる。第５に（多量のタスク）、授業はタスクが主体で成り立っていると言ってよい。第６に（協同学習）、かなりのタスクがペア・ワークである。10名程度のクラスなので、５つのペアができ、十分目が届く。第７に（内容・言語両面の学習支援）、題材となっているものを直接現地で確かめられることが多く、内容に関するサポートは最高の条件にあり、英語学習についても資格ある教師からのアドバイスが得られる。第８に（異文化理解・国際問題）、歴史が多く取り上げられ、異時代理解が図られる。また英国の現状についての話題も取り上げられる。第９に（４技能のバランス）、４技能はどれもフル回転という理想的な授業になっている。第10

に（学習スキルの指導)、学習スキルの指導も行われている。

この他、実際に英語圏に身を置くことで生活等から学ぶことについては、ここで逐一述べずとも、英語そのものでなく、英語圏において経験することすべてから学ぶという大きな成果があることは明らかである。しかも幾多のノーベル賞受賞者を輩出してきたケンブリッジ大学で学ぶことは、学術的にも刺激的な経験である。従って、このような研修科目はますますクリル的と呼ぶことができると考えられる。

７．事前研修と現地研修における科学の学びのクリル的性格

本稿で本節が特に設けられている理由は、筆者が九州大学の天文教育プロジェクトのメンバーとなっており[9]、現地研修専門科目の「ケンブリッジにおける科学」で、授業担当教員が生物系の教員であるにもかかわらず、天文学の側面を含めてもらえるように筆者から常日頃働きかけていて、重点化している部分だからである。英語教員が運営している研修に科学的要素があればあるほど、研修全体としてのクリル性が高くなると言えよう。

この天文教育プロジェクトは、理学研究院、工学研究院、基幹教育院の宇宙系教員と筆者とで構成してきた[10]。このグループでは2011～12年度に「九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクトＣタイプ：新しい宇宙教育プログラムの開発－科学・技術の素養と社会性向上を目指して－」（筆者は研究分担者）の資金援助を受け、これをペガスス・プロジェクトと呼び、キャンパスに口径40cm の反射望遠鏡を建屋とともに導入し、協同で観測系の高年次教養科目や座学系の総合科目で宇宙系の授業を担当してきた。続いて2013～15年度には「科学研究費助成事業学術研究助成基金助成金基盤研究（C)：総合的宇宙教育の実践研究」（筆者は連携研究者）も取得している。筆者もこれを受けて、英語授業で宇宙物理学の初歩を扱い（千葉康樹（編註）(2008))、観望会の手伝いをし、時折の講演行事にも登壇してきたが、本研修の現地研修での自然科学系の授業に、天文学の要素を毎年確保するように動いたことが、これまでで最大の貢献であると考えている[11]。

また、ケンブリッジは科学史に触れるには絶好の舞台である。街の中が科学の素材であふれている。少し挙げてみただけでも、下記のとおり枚挙に暇がない。

ニュートンの彫像：トリニティ・カレッジ（Trinity College）
ニュートンの遺髪や直筆原稿：同上レン図書館（Wren Library）
ダーウィンの彫像と銅像：ジーザス・カレッジ（Jesus College）
DNA 関係：旧キャヴェンディッシュ研究所（Cavendish Laboratory）跡、DNA 螺旋構造構想のパブ・イーグル（Eagle）（ワトソン、クリック）
動物学博物館（Museum of Zoology）
ケンブリッジ大学植物園（Cambridge University Botanic Garden）
シジウィック地質学博物館（Sedgwick Museum of Geology）
考古学人類学博物館（Museum of Archaeology and Anthropology）
ウィップル科学史博物館（Whipple Museum of the History of Science）
古典考古学博物館（Museum of Classical Archaeology）
極地博物館（The Polar Museum）（スコット）

この他ラザフォード、ホイットル、ホーキングなどに興味があれば関連するカレッジや研究部門を眺めてみることもできる。学術的な出会いではないが、筆者もラザフォードのあだ名であるクロコダイルの彫り物のいたずらを見たり、車椅子に座ってレストランで食事中のホーキング博士に出

会ったりしている。これまでの研修参加者の中からも、パブで偶然話かけられたのが実は有名なホログラムの研究開発者だったなどという話も時折聞く。また、ケンブリッジ大学出版局の直営書店や、地元で専門書をきちんと置く大型書店の Heffers など、大学に寄り添う権威ある書店で洋書の専門書に触れることもまたいい刺激である。ペンブローク・カレッジの図書館もまた、開架の科学系書籍や荘厳な建物のつくりに圧倒される。残念ながら、夏期プログラムの学生はカレッジに正規に在籍し修了書を受け同窓会にも名を連ねる存在でありながら、学士課程以上の学生とは異なり、大学図書館（University Library）で科学書を利用することはできない。英国で出版される著作権のある文献がすべて入る法定納本（legal deposit）の対象となる英国内 6 つの図書館の 1 つであり、日本セクションがあって専任の日本人スタッフまでいる充実ぶりであり、ぜひ見学してもらいたいとは思うものの、現実的には限界もある。

事前研修でも科学の学びの部分がある。まずは第 6 節で項目を列挙した調査発表事項であるが、ケンブリッジ大学の各カレッジを扱う部分で各カレッジ毎に有名な歴代の科学者についての言及がなされ、英国の科学者とその業績の項目ではケンブリッジ大学で行われている現代の研究や生活に多大な影響を与えた過去の研究が報告される。さらに、現地での専門科目の授業である「科学」を選択する学生は、科目概要の記載事項や与えられた専門語彙の勉強をすることになる。

８．まとめ：この英語・学術研修とクリル

本稿では、事前研修と現地研修で構成される本研修全体のクリル的性格が強いことを主張した。その目的のため、現地研修の専門科目、事前研修と現地研修を合わせての歴史文化学習、事前研修と現地研修を合わせての科学の学びの 3 つの観点を取り上げた。

特に現地研修はクリル的性格がより強い。その現地研修における英語科目と専門科目のうち、英語科目の中で英国の歴史文化が題材に採用される場合というのは、あくまで英語科目の枠の中で行われるものであり、英語運用能力の開発に第 1 の目的があることは論を待たない。しかし専門科目については、逆に専門科目の内容の修得が第 1 の目的であり、たまたま授業言語が英語であるから英語の運用の訓練にも結果的になっていると言える。これらの両科目が並存していることは、全体として通常の英語授業に比較して現地研修のクリル的性格がかなり強いことを意味する。全体としては学術英語認定科目のひとつなので間違いなく英語科目なのだが、「芸術」「英国史」「科学」などと内容は様々でありながら、それぞれが「英語で学ぶ○○」に取り組む貴重な機会を提供している。また、どちらの科目も日本である程度行うことができるが、海外研修の良さは、日本ではできないことにあるわけで、その観点からこれらを見てみると、英語科目で英国文化について市民に街頭インタビューを敢行して本物のデータを入手する、専門科目で取り上げられた項目に関係した事物を実際に見学に訪れるなど、本物を扱うことにより、英語で何事かを学んでいるのか、何事かを通して英語を学んでいるのかの区別がわからなくなる。こうした二兎を追う強いクリルの姿勢が、結局は英語の能力そのものを大きく伸ばすものと期待される。

事前研修はこの現地研修を成功させるために長期間にわたって行われるものである。従ってその内容もクリル的性格を帯びることは当然のことである。特に現地研修で行われる週末旅行の準備として、英国の歴史や地誌をしっかり勉強し、現地の施設や機関と連絡を取り、本物の情報や道具立てにより旅程を組み上げ、必要な予約を取っていく過程は、事前研修と現地研修が組み合わされているからこそできる学びである。

こうした本研修全体のクリル的性格を認識して募集を含めた運営に取り組んでいくことで、より

いっそう英語研修としての効果が生じると思われ、本稿をそのきっかけにしようと意図した。毎年30名までの参加学生数であるから規模は決して大きくはないが、学生が受けるインパクトを考えると、時に本稿のような考察を重ねながら発展させていくべきものであると考えた。本稿が本研修のクリル的性格を強く主張することに成功していれば幸いであり、また同類の事業を行っているまたは企画している方々に対して何らかのお役に立つようであれば望外の喜びである。

注

1 基幹教育については http://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/faculty/ を参照。
2 CALL は学習を１年次に行うが、成績に１年次４月と２年次４月に行われる英語力診断テスト（現行では TOEFL-ITP）のスコアとその上下動を加味するため、単位が認定される学期は２年次前期となっている。
3 ウェブ上の履修受付とプログラムによる抽選のシステムを構築して対応している。その詳細とその考え方等については稿を改める予定である。
4 英国の鉄道パスは外国人専用であるため、パスに伴う座席指定は日本国内でしかできない（オンラインでの予約ができない）。従って例外的に日本国内の旅行業者を利用することになる。これはＪＲのジャパン・レールパスを外国人が利用する場合の指定席予約が来日後の窓口だけに限定されているのと似ている。
5 宿泊については、予約業者のサイトでのやりとりだけであると、日付が間違って予約されていた、あるいは姓名が逆に登録されていて当日宿泊断られたなどという実例があるため、これまではメールや電話での再度の確認を推奨してきたが、今後は予約業者のサイトの利用を禁止する。またミニバン・ツアーの中には前日にリコンファームの電話連絡を要するところもあり、確認の目的を達することができる上に、英語における通話に多少の自信を持つことができるようになるのが利点である。
6 事前に知らされるのは専門用語だけでなく、いくつかのリーディング・リストも含まれるのだが、残念ながら実際には、九州大学における通常の学期中に、事前研修のメニューの他に英語で書かれた専門書を入手して読む余裕がないのが実情である。
7 九州大学伊都図書館の一角に、英国図書コーナーと称して、関連書をまとめて配架し、研修参加学生の閲覧（図書館の利用者なら誰でも可能）に供している。
8 １分としている背景には、まとまった知識としっかりとした構成力がなければなかなか話が１分続くのは難しいということの他、TOEFL-iBT のスピーキング・テストも念頭にある。
9 ペガスス・プロジェクトと称する。詳細は藤原他（2014）や http://artsci.kyushu-u.ac.jp/pegasus/ を参照。
10 基幹教育院の教員は2015年９月末で転出した。理学研究院の教員は2016年３月末で転出した。
11 筆者本人が登壇したわけではないが、鈴木他（2015）のような研究発表にまで至っている。

参 考 文 献

Coyle, Do, Philip Hood, and David Marsh (2010) *CLIL: Content Language Integrated Learning*, Cambridge University Press.

Cunningham, Antonia (2011)『図解　イギリスの歴史／ *Essential British History*』（小野茂・小野恭子

編註)、開文社.
池田真（2011）「CLIL と英文法指導：内容学習と言語学習の統合」『英語教育』2011年10月号.
和泉伸一・池田真・渡部良典（編集）（2012）『CLIL（内容言語統合型学習） 上智大学外国語教育の新たなる挑戦　第２巻　実践と応用』上智大学出版.
鈴木右文（2009）「海外英語研修の効果と条件 ── 九州大学のケンブリッジ大学英語研修 ──」（九州大学大学院言語文化研究院）第24巻、pp.19-27.
鈴木右文（2010）「英語・異文化学習における英国史教育の試み」『英語英文学論叢』（九州大学英語英文学研究会）第60集、pp.45-62.
鈴木右文（2013a）『ケンブリッジ大学英語・学術研修への招待　名門校で学ぶ、暮らす、国際人になる』九州大学出版会.
鈴木右文（2013b）「ケンブリッジ大学英語・学術研修の語彙力への貢献」『言語文化論究』（九州大学大学院言語文化研究院）第30巻、pp.99-108.
鈴木右文・藤原智子・花田俊也・山岡均（2015）「ケンブリッジ大学を舞台に含めた天文教育」日本天文学会2015年春季年会（於：大阪大学）（ポスター発表＋講演）.
千葉康樹（2008）（編註）『ホーキングが語る「宇宙のすべて」*A Briefer History of Time*』（原著者 Stephen Hawling / Leonard Mlodinow）開文社.
投野由起夫編（2013）『CAN-DO リスト作成・活用　英語到達度指標 CEFER-J ガイドブック』大修館書店.
藤原智子・鈴木右文・花田俊也・山岡均（2014）「九州大学ペガススプロジェクトによる文理融合型宇宙教育の成果」『第62回一般教育研究協議会議事録』、pp.35-391.
渡部良典・池田真・和泉伸一（共著）（2011）『CLIL（クリル）内容言語統合型学習　上智大学外国語教育の新たなる挑戦　第１巻　原理と方法』上智大学出版.

CLIL as an Overseas English Training Programme

Yubun SUZUKI

The present paper argues that a specialized English course at Kyushu University, entitled "The English and Academic Training Programme at the University of Cambridge," constitutes CLIL (Content and Language Integrated Learning). The course, which the author of the paper has convened over a number of years, is divided into two major subparts: advanced pre-training at Kyushu University and later overseas programme at Cambridge. Both parts of the course embody strong features of CLIL. In the latter programme, participants choose one of three specialized subjects, "Art and Architecture in the 20th Century," "The Making of Modern Britain," and "Science at Cambridge," all of which satisfy ten CLIL principles outlined in Ikeda (2011). In addition, the learning of British history and culture is fostered and the study of science is pursued during both parts of the course, and they also fulfill the ten principles. The author hopes that the paper will go some way towards helping those taking charge of, or planning to establish, a similar English training programme.